

巻頭言

改革の光と影 ― 生き残りを賭けて

一般財団法人 日本建築総合試験所
副理事長 川瀬 博



平素より当法人の業務に格別のご高配を賜り誠にありがとうございます。

GBRCの副理事長として、また試験研究センター長としてその任に就いてから早くも2年が経過し、その間沢山のことを学ばせていただきました。ここではGBRCの未来に関係する、私が最近特に問題だと感じていることについて少しお話したいと思います。

ご存じのように、グローバル経済の結合度が高くなるに従い世界は益々狭くなり、遥か何千kmも離れている場所で起こったことが我々の生活に直結する事態を招くようになっていきます。コロナ禍然り、ウクライナ情勢然りです。我が国のバブル崩壊後の「失われた30年」と言われる長期低迷を余儀なくされた根本的な原因は、成長の鍵であった共通の目標を我々は見失い、グローバル経済へのリンクを目指す果敢な挑戦に乗り出せなかったからだと言われています。「成功は失敗の母」というわけです。

しかしながら昨今の我が国の現状を見るに、失われた30年間の間に導入されたグローバル・スタンダードだと誤認した改革が我が国のあちこちを蝕んで、益々取り残されている感があります。卑近な例では国立大学改革が平成16年から継続的に進められ、国立大学に配分される基盤校費と呼ばれる基幹的経費が総額で40%も削減されてきている事実があります。これは平等に配分される基盤校費で大学は役に立たない研究をしているのではないかという批判があったため、その減額分は競争的資金として公募し審査で選ばれた課題に配分されています。しかし現実には競争的資金は増えているのに我が国の研究論文数はこの10年間減少し続けています。米国方式に範を取ったこの研究活性化施策が失敗しているのは、挑戦し失敗することを評価しない日本の文化に適合していないからです。

同じことは企業の終身雇用制の崩壊にも言えます。終身雇用制は実は戦後に導入された我が国独自の慣行でしたが、これがグローバル時代の成長を妨げるとして、派遣社員制度等により雇用調整が容易になりました。その代償として社員の忠誠心が失われ責任感も低下し、我が国企業特有の協働・連携による問題解決能力が失われてしまいました。

これらから学ぶべき教訓は何でしょうか？それは一つには他所ではうまく回っている施策も、それを文化の異なる地に導入する際には安易に導入しても成功しないということと、うまく行かないなら速やかに変更する勇気を持つ必要があるということです。GBRCは今年長期目標である「GBRCビジョン2030」を策定しました。変えるべきものは変え、守るべきものは守ることで、その目標を達成できるよう進めていきたいと思っています。